

侯方域「詠懷詩」注釈(上)

藤 井 良 雄

(昭和六十二年九月十日 受理)

一 侯方域伝*

侯方域は明の万曆四十六年(一六一八)三月に生まれ、清の順治十一年(一六五五)十二月に卒した。字は朝宗、河南省商丘の人である。祖父侯執蒲は万曆二十六年(一五九八)の進士で、官位は太常寺卿に至った。父の侯恂は、崇禎年間、兵部侍郎・戸部尚書・総督を歴官した。二代にわたり、高位高官の名望家であり、かくして侯家は商丘で著名となった。

侯方域は、幼年時代、父親について北京に住み、倪元璐(一五九三—一六四四)・范景文(一五八七—一六四四)に師事したことがあり、また多くの名望のある人物たとえば方以智(一六一一—一七一一)・呉偉業(一六〇九—一七一七)等と交友を結んだ。崇禎十二年(一六三九)、廿一歳の侯方域は南京に赴き郷試を受験した。このとき彼は初めて南方に來たのである。

南京は明朝の「陪都」(もと陪京・南都・留都と称せられた)であり、文化の粹が集まっている地区であるのみならず、東南地区の政治闘争の中心地でもあり、北京の政界の雲行きと一つ一つ関係があった。東南の文学結社が林立する中で、とりわけ有名な復社・幾社等は、東林党の精神を継承しており、「文を以て友と会する」をモットーにしている

が、実際は人物を裁量し、朝廷の政治を議論し、政治に対し清議であることを自負し、南京の政界で一つの強大な輿論の力となっていた。侯方域の南京での受験の一年前(崇禎十一年・一六三八)、南京では阮大鍼排斥事件が起こっていた。阮大鍼(一五八七—一六四六)は宦官魏忠賢(李進忠?—一六二七)の党人であり、崇禎二年、逆案(逆党の判決)が定められ、当時ちょうど南京にのがれ住んでいたが、寂寞に我慢がならず、文人と交際し、人目を引くように街に出かけたが、清議派の人々から容認されない。十一月ごろ、呉應箕(一五九四—一六四五)によって起草され、顧憲成(東林党の指導者一五五〇—一六一二)の孫の顧杲(?—一六四四)らが筆頭に名を列ねて『留都防乱揭』(『留都防乱公揭』と記載されているものもある)を発表し、阮大鍼の罪状を公布した。これは世間を一時さわがせた政治事件であった。^m 侯方域が南京に着いた頃は、こういった風波がまだ収まらぬところであった。阮大鍼は屏居し挙動を慎重にしていたが、それでもこっそり活動しており、復社の名士たちは度々盛んな議論をたたかわし、阮大鍼の輩を談笑の種として、はなはだ得意であった。

侯方域の祖父と父親は、政治的には東林党に属し、侯方域も自然に清流の側に立った。彼は名家の貴公子として、「儀觀偉然たり、雄懷もて

顧盼し」(容貌もなみはずれて優れ、雄たる思いで世界を見まわす)、瀟洒な風格がある。また早くから文名もあり、東南の諸名家たちの中にも彼をとくに知る者もい、或いは彼を一目で気に入った者もいて、当時の人は、彼と方以智・陳貞慧(二六〇四一五六)・冒襄(二六一一—一九三)と合わせ四公子と称した。彼が南京に到ると、早くもこの政治の風雲に巻き込まれてしまった。当事者の一人である黄宗羲(二六一〇—一九五)は、次のごとく述べている。

崇禎己卯(二六三九)金陵解試(郷試)には、先生(陳貞慧)・次尾(吳應箕)、国門広業の社を挙げ、大略掲中の一人あり(『留都防乱掲』に名を列ねている者を指す)。昆山の張爾公・歸徳の侯朝宗・宛上の梅朗三・蕪湖の沈昆銅・如皋の冒辟疆及び余数人、日として輿を連ね席を接せざるはなく、酒酣にして耳熟すれば、大鍼を咀嚼して以て笑樂となすこと多し。(「陳定生先生墓志銘」)

しかしながら、阮大鍼は侯方域の父親と以前北京で同時期に出仕した官僚で、侯方域の父親と祖父と交友したことがあり、そのまま過去の侯家との関係を利用し、侯方域を通じ、吳應箕・陳貞慧らの人にとりなしてもらい、彼らの諒解をとり付けて、政治上の再起を図ろうと思った。

当時、農民起義の烽火がすでに中原で広く燃え上がっていたが、南京はそれでも天下太平の有様であり、「是の時に当たり、江左全盛にして、舒(州)・桐(城)・淮・楚の衣冠の人士は寇を避け南渡し、大航に僑寓する者、且に万家ならんとし、秦淮灯火絶へずして、歌舞の声相ひ聞こゆ。」であった。侯方域も性来、声伎を好み、南京にやって来てのち、「食ごとに必ず妓を以つて侑む」ほどであった。彼は張溥(二六〇二—一四一)・夏允彝(一六一六—一六四六・崇禎十年進士)の紹介により、秦淮の

名妓李香と知り合い、才子佳人、非常に密切に交際した。阮大鍼はひそかに王という姓の客人を使って侯方域と交友し、李香の門に出入りさせ、屋方舟を雇い酒を買い殷勤にもてなし、続けざま八日、毎日同じようであった。李香が侯方域に尋ねた。「王將軍貧にして、客を結ぶ者に非ざるなり。公子盍ぞ之を叩かざる。」と。侯方域が幾度も問いつめてから、王はようやく阮大鍼が侯方域を通じて代わりに取り成してくるよう計画していることを話した。李香が侯方域に言うには、「妾は少くして仮母に従ひ陽羨君(陳貞慧)を識り、其の人高義有り、吳君(吳應箕)尤も錚錚として、今、皆公子と善し。奈何ぞ、阮公を以つて至交に負くや。且つ公子の世望を以つて、安んぞ阮公に事へしや。公子万巻の書を読みしに、見る所豈に賤妾に后れしや。」と。かくて侯方域は王との交際を止め、阮大鍼が復社の諸名士たちと誼を通じようとした目論見も水の泡となり、これより侯方域に対する恨み骨髓に達した。

侯方域がこのとき南京に来て受験し、かなりの東南の名流たちと交友を結び(陳貞慧とは後に息子と娘が結婚し親戚になっている)、闖党の殘党に反対する政潮に参与し、「俠にして慧なる」李香と知り合ったが、しかしながら科擧では失敗してしまった。郷試の及第者の榜が公表されたが、方域は落第し、郷里に帰ろうと思ったとき、李香は桃葉渡(南京の名所の一地点。秦淮河と青溪の合流する地方)に酒席を設け、琵琶の詞を歌って彼を見送った。李香は次のように述べたという。

公子の才名・文藻は雅に中郎(蔡邕)より減ぜず。中郎の学は行を補はず、今、琵琶詞伝ふる所の詞は固より妄なれど、然れども嘗つて董卓に昵みしは、掩ふべからざるなり。公子は豪邁不羈にして、又失意し、此より去りて相ひ見ゆること未だ期すべからず。願ふら

くは、終に自愛せよ。妾の歌ふ所の琵琶詞を忘るること無かれ。妾亦た復び歌はじ。

(「李姬伝」)

侯方域自身が記した『李姬伝』からみると、李香は歌をよくし踊りが上手であるのみならず、多才多芸、しかも頗る見識があるので、「俠骨琴心」(男気あふれ風流心を持つ人物)といえよう。後になって、孔尚任(一六四八—?)が侯方域と李香君との物語を題材にして、名高い『桃花扇』を作って、ついに侯方域と李香君の名を永遠に伝え、人々の熟知するところとなった。

崇禎十三年(一六四〇)、侯方域は南京から河南の郷里にもどった。河南地方は連年旱天と蝗害つづきで、赤茶けた大地がどこまでも広がり、ゆき倒れがあちこちで見られたが、官庁と政府軍が民衆をふみにじるのは天災よりもひどかった。それで、餓えた民衆が各地で烽起した。この年李自成が再び河南に入り、饑民で起義に加わる者が多くなり、その勢は原野を焼き尽くす火のようであった。その翌年(一六四一)になると、烽起軍は名高い都市を次々と攻略し、豫中・豫南(河南省中南部)を荒し廻り、商邱も今にも攻略される危険が迫った。崇禎十五年(一六四二)、侯方域は一家を引き連れて南京にのがれ住んだ。六月、明朝廷は開封の囲みを解くために、侯恂を起用して総督に任じ、軍隊を率いて開封の救援に向い、侯方域も南京から侯恂の軍中までやって来た。当時、李自成は左良玉(一五九一—一六四五)等の明朝援軍を朱仙鎮で新たに破り、彼らの勢いは愈々大きく、侯恂が統率するのはわずか数万に過ぎず、將校たちはわがまま兵卒は弱く、何も出来ず封丘(河南省、明代開封府に属する)で困っていた。とても渡河は出来ず、囲みを解く策も見つからず、さらに朝廷からは督促および責任追求が非常に急であった。侯方域は父親に建議した。紀律をととのえるには、兵を抱えたまま自力を保つ

ている総兵の許定国を殺して威厳を示し、そうしてから渡河して南下し、各城市の攻防は争わず、李自成が開封を包囲している軍隊を避けて、各地で砦を築いて自衛している地主たちを集め武装させ、左良玉の兵と合わせて、徐ろに決戦を図るのだと。これはまさに書生ばい見方と言わざるをえないばかりか、まして明朝廷は本来開封をそのままにして置くことを侯恂に許可するはずもない。侯恂は息子が軍中で騒動を起こすのを恐れたので、それで侯方域に南京に戻るよう命じた。九月、黄河が開封で決壊した。まもなく、侯恂は逮捕され獄につながれ、そのまま後まですつと李自成が北京を陥落させるときまで出獄出来なかった。

崇禎十六年(一六四三)、李自成は河南・湖北を席卷し、左良玉は武昌から九江に退き、糧食を求め眷属を安心させるため、流れに順って南京に至ると声明を発した。この時、湖北・安徽・河南等の地方の大部分の官僚郷紳は南京に避難しており、左良玉の軍隊が南京に来て略奪し尽すのを恐れ、人々はおののいていた。さらに阮大鍼が謠言をとばし、侯方域は左良玉とは旧知であり、左良玉に内応しようとしていると流言し、人々の恐りを侯方域の方へ向けさせようとした。それで、侯方域は宣興の陳貞慧の家にのがれ入ることにし、出発前に『癸未(一六四三)金陵を去る日に阮光祿に与ふる書』をしたため、阮大鍼が私恨を持ち禍を人に及ぼすことを痛斥し、「陰毒左計一に此に至る」と書いたもので、ここから阮大鍼の怒りはさらに容赦のないものとなった。

崇禎十七年(一六四四)三月、李自成は北京を攻め落とす、崇禎帝は自縊したので、馬士英(一五九一—一六四六)らが福王朱由崧を南京に擁立した。この南京小朝廷は、国事などそっちのけで、派閥斗争に熱を上げ、権力を握っていた馬士英は阮大鍼を起用し、いく人かの正義派の大臣たち、史可法(一六〇一—一四五)は締め出されて揚州の司令長官とな

り、高弘図（萬歴三十八年進士・？―一六四五）・姜曰廣（？―一六四五）らも次々と罷免され、阮大鍼は機会に乘じ自分に異を唱える者を排除し、侯方域の友人でも、殺される者、逮捕される者、亡命遁走する者もあり、侯方域自身も指名手配書に名を列ね、揚州の史可法の軍中へ逃げのびるほかはなかった。そして高傑の部隊に随って河南まで行った。順治三年（一六四六）五月、南京は戦わないうまま降伏し、侯方域はそれでこの年秋転転として河南商邱に返った。

清兵の入関およびその後の揚州の大虐殺、江南を降し、薙髮と衣服の変更、これは一つの「天崩れ地坼く」時代であった。時局がら人人は嚴酷な試練に直面し、侯方域の同志と友人たちは、ほとんどが身を国にささげるといふ諾言を実践した。呉應箕・夏允彝・陳子龍（一六〇八―一四七）などは起兵して失敗し壮烈に国に殉じた。黄宗羲は自分の安危も顧みずに卓絶した困難な斗争を続けた。明季の「四公子」中、方以智は抗清闘争に智力の限りを尽くしたが、最後には仏門に遁入した。冒襄と陳貞慧は生涯出仕せず、あくまで在野を貫いた。侯方域は残した多くの文章中、「江山の恨み、禾黍の悲しみ」の現われる字間行間は非常に感慨深く、彼は呉偉業に手紙を書きおくり、呉氏に山より下って出仕してはならない、一生の名節に係るること甚だ重大であると勧告し、「学士（呉偉業）の出処、將に此こより分れんとす、天下後世の学士を觀望する者も亦た此こより分れん。」と述べた。しかしながら、侯方域自身の行動は、彼の友人たちと比べて反って大いに遜色がある。順治七年（一六五〇）、清朝の直隸・河南・山東三省總督張存任（？―一六五二）は、榆園の賊軍に対処する方法が見つからず、わざわざ侯方域を召見し、あわせて幾度も手紙で計略を尋ねると、侯方域は『上三省督府剿撫議』の陳述書を奉り、張存仁に榆園軍に対処する十の建議を提案したので、彼か

ら重視されるようになった。順治八年（一六五一）、侯方域は河南鄉試に参加したが、ただ副榜（補欠合格の如きもの。任用される機会が与えられる。）を得ただけで、任用されはしなかったけれども、科挙に受験したこと自体、前者の抗清の志士たち（呉・夏・陳・黄）の幾度挫折しようとも不屈でやり遂げんとしたこと、後者の諸大儒（方・冒・陳）が死を冒してまで清朝廷の徵聘を拒絶したこととは、実に大変な相違がある。侯方域が清朝に出仕しないことを堅持してほしいと思っていた人々の心の中で、彼の名声は大いに減じた。後になって、黄宗羲は『明文類』を編輯するが、政治上の原因から侯方域の文章を選び入れることに反対する人もあった。黄宗羲は、宋代の姚孝錫（一〇九七？―一二七九？）が以前金に仕えたが、『元文類』を編輯した元好問（一一九〇―一二五七）は結局彼の文章を選したことで以つて、弁解とし、「其の心を原ぬるなり。」と説いた。

侯方域は詩をよくし、古文も上手であり、彼の古文は剛健で枯れていて力強く、表現は精煉されており、非常に特色がきわ立って、甚だ當時の人々から推重せられた。彼の友人の徐作肅（一六一六―一八四）は、侯方域の古文が、もっぱら明代の文章の冗長・淺見・柔媚・愚図愚図とは全く反対で、唐宋八大家になぞられると評価している。後になると、彼と魏禧（一六二四―一八〇）・汪琬（一六二四―一八九〇）と合わせ「国初三大家」と称する人もある。揚州八怪の一人である鄭燮（板橋一六九三―一七六五）は、侯方域の文章を非常に高く評価している。

愚謂へらく、本朝の文章、当に方百川（舟・一六六五―一七〇二）の制芸を以て第一と爲し、侯朝宗の古文、之に次ぐべし。朝宗の古文は新を標し異を領し、目前に指し画き、絶へて古人の羈絆を受けず、然れども語は適からず、氣は深からずして、終に百川に一席を譲

る。

(鄭燮「滌泉署中與舍弟第五書」)

侯方域の著作には、すでに散佚したものがあり、『壯悔堂文集』十卷
『四憶堂詩集』六卷が現存している。

注

※ 本伝記は、清史編(輯)委(員)会編「清代人物伝稿」上編第一卷(中華書局一九八四・北京)に掲載される羅明氏「侯方域伝」の翻訳である。

(1) ある書物では、侯方域も復社名流で「留都防乱掲」の発起人の一人として名を列ねているが、実際は侯方域はその時南京に居なかったものであり、黄宗羲・吳偉業・全祖望の関係する著述や「明史」などもすべて言及していないし、侯方域自身もその「棲山堂遺集序」に於いて「余、吳子(應箕)と交わるは、歳は己卯(崇禎十二年)に在り。」と述べている。これより以前、侯と吳應箕とはまだ面識がなく、吳應箕は「留都防乱掲」の起草者であった。明らかに侯方域はその事には未だ参画していなかったのである。

(2) 吳偉業「梅村家藏稿」卷三六、「冒辟疆五十寿序」。

(3) 黄宗羲「南雷文定」前集七。

(4) 「梅林家藏稿」卷二八、「宋子建詩序」。

(5) 全祖望(一七〇五—一七五五)「鮚埼亭集」卷一一、「黎洲先生神道碑文」。

この時、侯方域の父親は尚獄中にあつたので、侯方域が声色に流連していたのに対し、黄宗羲などの人が言いたてたことがあつた。

(6)(7)(8) 「壯悔堂文集」卷五、「李姬伝」

(9) 侯方域が指名手配されたわけは、もとより阮大鍼が害を加えるつもりがあつたからであるが、ただ侯恂とも関係がある。侯恂は、李自成が北京を陥落させた後、曖昧ではっきりとした態度でなかったもので、(南京)弘光朝廷は六等ほどに(賊に従ふ諸臣)の罪を定め、侯恂は四等の罪がきせられた。(「弘光実録鈔」卷三に見ゆ)当時、江北四鎮の一城市の劉澤清が南明政府に逮捕を要求した。「厳しく故の総督侯恂及び其の子方域を緝えよ。朝廷皆意を曲げて之に従ふ。」(「明史」列伝一六一「劉澤清伝」)

(10) 「壯悔堂文集」卷三「與吳駿公書」。順治十年(一六五三)、吳偉業はついに

に招聘に応じ清朝に出仕した。後になって、この事を回憶して、吳偉業は侯方域の忠告に負いたといつまでも思っており、侯の死後、吳偉業は次のごとき詩がある。

死生總負侯贏諾 死生 総て負く 侯贏の諾

欲滴椒漿淚滿樽 椒漿を滴さんと欲すれば 涙 樽に満つ

自注に「朝宗、婦徳の人なり。書を貽りて、終に隠れて出でざるを約す。余、世の逼る所と為り、宿諾に負く有り。故に之に及ぶ。」とある。「梅村家藏稿」卷一六「懷古兼弔侯朝宗」に見ゆ。

(11) 「壯悔堂文集」卷四。

(12) 「清史稿」卷三三七「張存仁伝」には、「盜、榆園に発し、大名諸県の害と為るに、存仁、婦徳の侯方域の才を聞きて、書を貽り盜を治むる策を尋る。方域具に以て対へ、存仁其の計を用ひて、盜悉く平らぐ。」とあり、侯方域の陳述の効用を誉めているのは確かであろう。

(13) 全祖望「鮚埼亭集」卷十一「黎洲先生神道碑文」。

(14) 上海古籍出版社出版「鄭板橋集」第二一頁。

二 侯方域「詠懷詩」二十一首・丙戌(一六四六)作」注釈

其一

- | | | |
|---|-------|---------------|
| 1 | 虞舜昔端委 | 虞舜 昔 端委にして |
| 2 | 安坐彈鳴琴 | 安坐して鳴琴を弾ず |
| 3 | 薰風習習至 | 薰風 習習として至り |
| 4 | 貴適無為心 | 無為の心に適ふを貴しとす |
| 5 | 道高一何逸 | 道高くして一つに何ぞ逸なる |
| 6 | 五絃餘清音 | 五絃 清音を餘す |
| 7 | 玄化非有形 | 玄化 形有るものに非ず |
| 8 | 奈何任鈞深 | 奈何ぞ 鈞深に任せんや |

1 「禮記樂記」昔者、舜作五絃之琴、以歌南風。

〔左思「吳都賦」(文選卷五)〕蓋端委之所彰、高節之所興。劉淵林注曰左氏伝(哀公七年)太伯端委以治周禮。端委、禮衣。委貌謂冠、袖長而裳齊委至地也。

2 〔阮籍「詠懷詩」其一〕起坐彈鳴琴。

3 〔左思「魏都賦」(文選卷六)〕惠風如薰、甘露如醴。李善注曰、孔子家語、舜曰南風之薰兮、可以解吾民之愠。

〔毛詩谷風〕習習谷風、以陰以雨。

4 〔論語衛靈公〕子曰、無為而治者、其舜也與。夫何為哉、恭己正南面而已矣。

5 〔史記日者列伝〕道高益安、勢高益危。居赫赫之勢、失身且有日矣。

6 〔淮南子詮言訓〕舜彈五絃之琴而歌南風之詩、以治天下。

〔淮南子兵略訓〕因形而與之化、隨時而與之移。夫景不為曲物直、響不為清音濁。

藤井良雄

7 〔曹植「責躬詩」(文選卷二十)〕玄化滂流、荒服來王。李善曰、玄道也。謂道德之化也。蔡邕陳留太守頌曰、玄化治矣。

〔文子道原〕有形則有聲、無形則無聲。有形產于無形、故無形者有形之始也。

8 〔周易繫辭伝上〕備物致用、立成器以為天下利、莫大乎聖人。探賈索隱、鈎深致遠、以定天下之吉凶、成天下之亹亹者、莫大乎蓍龜。

昔、舜帝は朝廷の礼服のまま、ゆったりと琴を弾いたという。温和な風がそよそよ吹いて来て(民の心を和やかにする)舜の政は、無為の(治の)心に適ふことを貴ぶ。道が高尚であれば本当に何と安楽なことであろう。五絃の琴の音は清らかなことだ。舜の至徳の教化は眼で見えるような形の有るものではないのだから、どうして深くさぐりを入れる

ことなど出来ようか。

其二

1 鳳皇自天來 鳳凰 天より来たりて

2 三顧頻迴翔 三顧 頗る迴翔す

3 羽儀肅威潔 羽儀 威潔きせつ肅さくはり

4 一鳴振清芳 一たび鳴きて清芳を振るふ

5 碧梧結秋實 碧梧 秋實結び

6 晚啄亦何妨 晚啄 亦た何の妨げあらん

7 嗟彼稻粱羣 嗟 彼の稻粱に羣して

8 徒以象中腸 徒だ以て中腸を象やしろふのみ

9 千仞飛空虛 千仞 空虛を飛べば

10 胡為籠與房 胡なんぞ為すれぞ 籠と房と

11 岐周有聖人 岐周に聖人有り

12 乃始下朝陽 乃ち始めて朝陽に下る

13 若非感玄德 若し玄德に感ずるに非ざれば

14 豈棲枳棘傍 豈に枳棘の傍に棲まんや

1 〔阮籍「詠懷詩」其七十八〕林中有奇鳥 自言是鳳凰

〔嵇康「幽憤詩」〕匪降自天、寔由頑疎

2 〔三國志蜀書・諸葛亮傳「出師表」〕先帝不以臣卑鄙、猥自枉曲、三顧臣於草廬之中。

〔阮籍「詠懷詩」其七十八〕一去崑崙西 何時復迴翔

3 〔嵇康「兄秀才公穆入軍贈詩」〕抗首漱朝露 晞陽振羽儀

4 〔史記滑稽列伝〕王曰、此鳥不飛則已。一飛冲天。不鳴則已。一鳴驚

人。

〔阮籍「詠懷詩」其一五〕修容耀姿美 順風振微芳

5 〔杜甫「秋興八首」〕香稻啄餘鸚鵡粒 碧梧棲老鳳凰枝

〔三国志・魏邢顗傳・劉楨「與曹植書」〕採庶子之春華 忘家丞之秋

實

7 〔杜甫「同諸公登慈恩寺塔」〕君看隨陽雁 各有稻粱謀

8 〔荀子榮辱〕芻豢稻粱

9 〔賈誼「弔屈原文」(文選卷六十)〕鳳凰翔于千仞兮 李善曰、文子

曰、鳳凰飛千仞、莫之能致也。

10 〔揚雄「羽獵賦」(文選卷八)〕騰空虛 距連卷

〔周礼夏官司弓矢〕充籠箠矢。注、籠竹箠也。

11 〔春秋左氏伝宣公十二年〕納諸厨子之房。注、房箭舍也。

12 〔孟子離婁〕文王生於岐周、卒於畢郢、西夷之人也。

13 〔大雅卷阿〕鳳凰鳴矣 于彼高岡 梧桐生矣 于彼朝陽

14 〔尚書舜典〕重華協于帝、濬哲文明、溫恭允塞 玄德升聞 乃命以

位。

14 〔後漢書仇覽傳〕(王)渙謝遣曰、枳棘非鸞鳳所棲、百里豈大賢之

路。

鳳凰が天からやってきて、三たび見廻して、よほど飛び戻ろうとした。その羽振りは威儀があつてよく整つており、一度鳴くと、清らかな香りを振りまくようだ。碧梧は秋になつて実を結び、遅れて啄んでも何の妨げもない。ああ、それにしても、あの稲粱に群がる鳥たちは、ただ自分の腸をこやしているだけだ。千仞の虚空を飛翔する鳳凰にとって、えびらや矢筒など何にもならぬ。岐周に(鳳凰のような)聖人がいて、

ようやく岐山の東面を下った。もしも彼の深い徳に感じ入ることがなかったら、どうして苦しい枳棘の傍に住んでおれようか。

其三

1 千秋風雅堂 千秋 風雅の堂

2 入室蘇與李 室に入るは 蘇と李と

3 陰山夏飛雪 陰山 夏 雪飛び

4 酪漿寒愈旨 酪漿 寒くして愈々旨し

5 漢恩誠不厚 漢恩 誠に厚からざるや

6 去留從茲始 去留 茲より始まる

7 馬首陳鄙詞 馬首に鄙詞を陳ね

8 願過北平趾 北平の趾を過ぎんと願ふ

9 豈不戀故鄉 豈に故郷を恋はざらんや

10 高義愧君子 高義 君子に愧づ

11 少卿盛文采 少卿 文采を盛んにするも

12 零落亦如此 零落 亦た此くの如し

1 〔阮籍「詠懷詩」其十九〕千秋萬歲後 榮名安所之

〔蕭統「文選序」〕風雅之道、粲然可觀。

2 〔論語・先進〕子曰、由也升堂矣、未入於室也。

3 〔陸機「飲馬長城窟行」(文選卷二八)〕驅馬陟陰山 山高馬不前
李善曰、漢書(匈奴伝)曰、侯應上書曰「臣聞北邊塞至遼東、外有陰山。」

〔宋玉「招魂」〕魂兮歸來、北方不可以止些。增冰峨峨、飛雪千里些。

- 4 「李陵「答蘇武書」(文選卷四十一)」糴肉酪漿、以充飢渴。李善曰(漢書西域伝)烏孫公主歌曰、穹廬為室兮旃為牆。肉為食兮酪為漿。
- 5 「同右「李少卿答蘇武書」」陵雖孤恩、漢亦負德。李善曰、言陵無功、以報漢為孤恩。漢戮陵母、為負德。
- 6 「王維「李陵詠」」少小蒙漢恩 何堪坐思此
- 7 「沈約「齊故安陸昭王碑文」」北風未起、馬首便以南向。
- 8 「史記・李將軍列伝」於是天子乃召拜廣為右北平太守。廣居右北平。匈奴聞之、號曰漢之飛將軍、避之數歲、不敢入右北平。
- 9 「蘇武「詩四首」(文選卷二十九)」征夫懷遠路 遊子戀故鄉 李善曰、漢書(高帝紀)高祖謂沛父兄曰 游子悲故鄉
- 10 「沈約「宋書謝靈運伝論」」英辭潤金石 高義薄雲天
- 11 「江淹「詣建平王上書」(文選卷三十九)」敝名為辱、敝形次之。李善曰。尸子曰、衆以敝形為辱、君子敝義為辱。
- 12 「吳質「答東阿王書」」發函伸紙、是何文采之巨麗、而慰喻之綢繆乎。
- 12 「江淹「雜體詩三十首」班婕妤・詠扇」君子恩未畢 零落在中路

永遠に称えられる文学の殿堂、この殿堂に入れるほど拔群なのが蘇武と李陵である。辺境の陰山では夏でも風に雪が舞うが、酪漿は寒ければ寒いほど美味しい。漢の恩は本当に厚くなかったのだろうか。行くと留まるとの別がここから始まる。漢に帰る蘇武の馬の首のところで、拙いことを陳ね、あの李広將軍が陣取った北平を訪れてみたいと願った。どうして故郷が恋しく思わないことがあるうか。高潔な忠義を遂げられ

ないことが君子として恥ずべきことなのだ。李陵は文采を盛んに上げはしたが、このように零落したのは致し方ないのだ。

其四

- 1 種穀城西村 穀を種う 城西の村
- 2 夜出城西道 夜出づる 城西の道
- 3 聚落生炊煙 聚落 炊煙生じ
- 4 場稼互收保 場稼 互に收保す
- 5 明月照大荒 明月 大荒に照り
- 6 零露寒宿草 零露 宿草に寒し
- 7 啾啾雙黃鵠 啾啾として 雙黃鵠
- 8 化為白頭老 化して白頭の老となる
- 9 似言慶曆間 慶曆の間と言ふがごとし
- 10 涕淚灑清昊 涕淚 清昊に灑ぐ
- 11 戰伐三十年 戰伐の三十年
- 12 常思太平好 常に太平の好きを思ふ

- 1 「漢書食貨志」種穀必雜五穀以備災害。
- 2 「杜甫「日暮」」將軍別換馬 夜出擁雕戈。
- 3 「蘇軾「東坡八首并敘」」穿城過聚落 流惡壯蓬艾
- 4 「陸游「過村店有感」」炊煙生旅竈 野水漱寒沙
- 4 「毛詩豳風七月」九月築場圃、十月納禾稼。毛伝曰、春夏為圃、秋冬為場。

「史記廉頗藺相如列傳」(李牧)為約曰、匈奴即入盜、急入收保。有敢捕虜者斬。匈奴每入烽火譴、輒入收保、不敢戰。

5 〔阮籍「詠懷詩」其一八〕微風吹羅袂 明月耀清暉

〔國語吳語〕今吳民既罷、而大荒薦饑、市無赤米。

6 〔陸機「園葵詩」〕〔文選卷二十九〕「零露垂鮮澤、朗月耀其輝。李善

曰、毛詩〔鄭風〕日野有蔓草 零露漙漙。

〔江淹「雜體詩三十首」陸平原・蜀臣〕但没多拱木 宿草凌寒煙

7 〔玉台新詠・古樂府隴西行〕鳳凰鳴啾啾

〔蘇武「詩四首」〕願為雙黃鵠 送子俱遠飛 〔阮籍「詠懷詩」其

十〕寧與燕雀翔 不隨黃鵠飛 黃鵠遊四海、中路將安歸。

8 〔曹丕「與吳質書」〕已成老翁、但未白頭耳。

9 〔王粲「贈蔡子篤詩一首」〕中心孔悼 涕淚漣而。

10 〔謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首」平原侯植〕哀音下迴鶴 餘哇徹清

昊

11 〔三国志魏書・辛毗伝〕連年戰伐、而介冑蟻蝨、加以旱蝗、饑饉並

臻。

12 〔干寶「晉紀總論」〕雖太平未洽、亦足以明吏奉其法、民樂其生、百

代之一時矣。

穀物を種え付けている城西の村、夜、城西の道を出かけて来ると、村の聚落からは、竈の煙がたちのぼり、どの家でも取り入れ場には作物が集積してある。明月は原野を照らし、降り下る露は宿草に寒い。啾啾と鳴き天空を飛ぶ二羽の黄鵠、年老いて白髪頭となつてしまつたが、今こんな時、あの隆慶(一五六七―七二)・万曆(一五七三―一六二〇)の平和な時代なのだと言っているようだ。(そんな鳴き声を聞けば)涙が湧いて清天に流れそそぐ。三十年このかた戦伐が続き、常に太平の世の好きを思っていた。

其五

1 南方有美人 南方に美人有り

2 永矢發清歌 永く清歌を發せんことを矢ふ

3 跋涉往從之 跋涉して往き之に従わんとするも

4 蹇裳不能過 裳を蹇げて 過ぐるあたはず

5 豈無舟與梁 豈に舟と梁と無からんや

6 晏安徒蹉跎 晏安 徒だ蹉跎するのみ

7 精衛尚填海 精衛 尚ほ海を填め

8 何況但江河 何況んや但だ江河のみをや

9 蛾眉苦易盡 蛾眉 はなはだ尽き易く

10 黃金焉用多 黃金 焉くんぞ多きを用ゐん

11 君子崇令名 君子 令名を崇び

12 嗟哉老則那 ああ、老ゆれば則ち那んせん

1 〔阮籍「詠懷詩」其十五〕西方有佳人 皎若白日光

2 〔毛詩衛風考槃〕獨寐寤言 永矢弗諼

3 〔陸機「前緩聲歌」〕太容揮高絃、洪崖發清歌。

4 〔毛詩鄘風載馳〕大夫跋涉 我心則憂

5 〔張載「擬四愁詩」〕我所思兮在營州 欲往從之路阻脩

6 〔毛詩鄭風蹇裳〕子惠思我 蹇裳涉淖

7 〔陶潛「擬古詩一首」〕豈無一時好 不久當如何

8 〔毛詩大雅大明〕造舟為梁、不顯其光

9 〔陶潛「答龐參軍」〕豈忘晏安 王事靡寧

10 〔阮籍「詠懷詩」其四十三〕願為三春遊 朝陽忽蹉跎

7 〔江淹「雜體詩三十首」阮步兵詠懷（文選卷三十一）〕精衛銜木石
誰能測幽微 李善曰山海經（北山經）曰發鳩之山有鳥名精衛。赤帝之
女娃。女娃遊於東海、溺而死。不反、化為精衛。常取西山木石以填東
海也。

- 9 〔陸機「日出東南隅行」〕美目揚玉澤 蛾眉象翠翰
10 〔阮籍「詠懷詩」其七〕黃金百鎰盡 資用常苦多
11 〔江淹「雜體詩三十首」王侍中・懷德〕福履既所綏 千載垂令名
12 〔陸機「歎逝賦」〕時飄忽其不再 老晚晚其將及

雄 良 井 藤
南方には、よき人がいて、いつまでも清歌を詠い続けることを誓って
いるという。山川を跋涉して行き彼の人にお供したいのだが、水が深く
裳を漚げ渡することも出来ぬ。まさか舟も橋もないことがあろうか。安逸
の日々はたちまちついえ去ってしまった。あの精衛は、それでも海を填
めようとしている。ましてそれも江河だけではないのだ。蛾眉の美人の
容貌もはなはだ移ろいやすく、黄金もどうしてたくさん費せようか。君
子は令名を崇ぶのであって、ああ、老いさらばえては、どうしようもな
い。

其六

- 1 奔霆激雲中 奔霆 雲中に激し
2 長虹亘天外 長虹 天外に亘る
3 造化忽不常 造化 忽ち常ならず
4 陰晴適以會 陰晴 適々以て会す
5 君子安義命 君子 義と命とに安んじ
6 履順無顛沛 順を履めば顛沛無し

- 7 紛紛僥倖子 紛紛たる僥倖の子
8 嗟為寵祿害 嗟 寵祿に害せらる
9 猶龍戒泰淫 猶龍 泰淫を戒しむ
10 旨哉若龜艾 旨き哉 龜艾の若きは

- 1 〔蘇軾「芙蓉城詩」〕夢中同躡鳳凰翎 徑度萬里如奔霆
2 〔阮籍「詠懷詩」其四十二〕包冠切浮雲 長劍出天外
4 〔白居易「遊悟真寺詩」〕赤日閒白雨 陰晴同一川
5 〔韓詩外傳〕安命養性者、不待積委而富。
〔礼記・祭義〕尊仁安義、可謂用勞矣。
6 〔顏延之「演連珠」〕蓋聞匹夫履順則天地不違一物、投誠則神明可
交。

- 〔歐陽建「臨終詩一首」〕（文選卷二十三）況乃遭屯蹇 顛沛遇災患
李善曰論語（里仁篇）子曰、顛沛必於是
7 〔管子・樞言〕紛紛乎若乱絲 遺遺乎若有從治。
8 〔阮籍「詠懷詩」其八〕膏火自煎熬 多財為患害 布衣可終身 寵祿
豈足賴

- 9 〔史記・老子傳〕孔子去、謂弟子曰、吾今日見老子、其猶龍邪。
〔漢書・嚴安傳〕養失而泰、樂失而淫、禮失而采、教失而偽。偽采淫
泰、非所以範民之道也。
10 〔周易・繫辭上〕探賈索隱、鈎深致遠、以定天下之吉凶、成天下之
聲聲者、莫大乎蓍龜。

すさまじい稲光が雲の中を猛烈に走り、（雨の上った）そのあと、長
い虹が天のかなたまで掛かっている。自然は忽然と変化して常なるとき

はないが、たまたま、陰りと晴れがピタリと来た。君子は義と命とに照らし、順序正しき立場を履めば、つまづき倒れることはない。僥倖の人々はたくさんいるが、ああ、何とその龍縁のために身を滅してしまったことか。龍のごとく玄深な老子も、ゆき過ぎを戒めている。すばらしいことだ、天下の吉凶を知らせる卜筮の術は。

其七

- 1 檜柏高參天 檜柏 高く天に参^{いた}り
- 2 常為藤蘿欺 常に藤蘿の欺くところと為る
- 3 勁心炤古色 勁き心 古色炤き
- 4 直幹無曲枝 直き幹 曲枝無し
- 5 柔條善依附 柔条 善く依附し
- 6 瞬息密葉滋 瞬息にして 密葉滋し
- 7 主人命剪伐 主人 剪伐を命ずるも
- 8 焉知根不離 焉んぞ知らん 根の離れざるを
- 9 運斤一以下 斤を運らし 一に以て下せば
- 10 去蠹木乃虧 蠹を去りて 木乃ち虧く

1 (汪克寛「夫子之牆賦」)「梗楠連雲而喬鬱、檜柏參天而扶疎」
 (曹植「送應氏詩」(文選卷二〇))「垣牆皆頓摧 荆棘上參天 李善
 曰孟子曰太山之高、參天入雲。

2 (孫觀「吳門道中詩」)「数声好鳥不知處 千丈藤蘿古木昏」
 3 (駱賓王「浮查」詩)「貞心凌晚桂 勁節掩寒松」
 (集韻)炤、光也

(王安石「崑山慧聚寺次孟郊韻詩」)「掃石出古色 洗松納空光

- 4 (丘遲「題琴朴奉柳吳興」)「清心有素體 直幹無曲枝」
- 5 (左思「雜詩一首」)「柔條旦夕勁 綠葉日夜黃」
- 6 (陶潛「形影神・神釋」)「與君雖異物 生而相依附」
- 7 (陸機「招隱詩一首」)「輕條象雲構 密葉成翠幄」
- 8 (杜甫「苦竹」)「軒墀曾不重 剪伐欲無辭」
- 9 (莊子・徐無鬼)「匠石運斤成風、聽而斲之。」
- 10 (沈約「齊故安陸昭王碑文一首」(文選卷五十九))「首鼠疆界 災蠹彌廣。李善曰說文蠹、木蟲也。以喻殘賊。

ひのきは空高く天にとどくほど伸びているが、いつも藤蘿がまきついている。ものに負けない勁き心のひのきは、古色輝き、まっすぐな幹には曲った枝もない。若い枝がたくさん幹により付いて、たちまちのうちに、みっしりと葉がおい繁った。主人は、(陽を遮る大きな)ひのきを剪伐するよう命じたが、どうして根はしっかりと残っているのが、わからないのだろうか。斤を一刀のもと振りおろして切れば、それとともに木食い虫もまた去ったが、木のほうは地上の姿をなくしたに過ぎぬ。

其八

- 1 海燕春始來 海燕 春 始めて来り
- 2 朔鴈秋云歸 朔鴈 秋 云^やり帰る
- 3 各生大塊間 各々 大塊の間に生き
- 4 寒暑相因依 寒暑には相因り依る
- 5 既為萬物母 既に万物の母の為に
- 6 寧使本性違 寧くんぞ本性をして違はしめん
- 7 鳬頸善用短 鳬頸 善く短きを用ひ

- 1 〔李紳「江南暮春寄家詩」〕 鴻溝斷續翻雲去 海燕差池拂水回
 - 2 〔江總「并州羊腸坂」〕 驚風起朔鴈 落照盡胡桑
 - 3 〔莊子・大宗師〕 夫大塊載我以形，勞我以生，佚我以老，息我以死。
 - 4 〔易・繫辭下傳〕 寒往則暑來，暑往則寒來，寒暑相推而歲成焉。
- 〔阮籍「詠懷詩」其十〕 迴風吹四壁 寒鳥相因依

- 5 〔老子・第一章〕無名、天地之始、有名、萬物之母。
6 〔杜甫・柴門〕萬物附本性 約身不願客。

7〔莊子・駢拇〕是故鳧脰雖短、續之則憂。鶴脰雖長、斷之則悲。故性長非所斷、性短非所續、無所去憂也。

- 8 〔古詩「為焦仲卿妻作」〕 十七為君婦 心中常苦悲

- 9〔謝瞻「弭子房詩一首」〕神武陸三正 裁成被八荒 李善曰周易（泰）曰 天地交泰。后以裁成天地之道、輔相天地之宜、以左右民。

- 10〔陸機「文賦」〔文選卷一七〕〕方天機之駿利、夫何紛而不理。李善曰、莊子（秋水）曰、蛟曰、今動吾天機、而不知其所以然。司馬彪曰、天機自然也。又（大宗師）曰、其耆欲深者、其天機淺也。

- 11〔莊子・齊物論〕毛嬙麗姬、人之所美也。魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟。

〔莊子・山木〕入獸不亂羣、入鳥不亂行。

- 12 〔庾信「代人乞致仕表」〕明憲不敢以纖負、玄造竟微于滴助

〔周易・繫辭下傳〕子曰 知幾其神乎。幾者動之微、吉之先見者也。

燕は春やつて来て、雁は秋めぐり帰ってくる。おのおの大自然の中で生を享け、寒暑には身を寄せ合つて助けあう。すべて万物の母によって存立しているので、どうしてそれぞれ本性と違うことがあろうか。鴨の首は短いが使うのが上手で、これを長くのばしてやると鴨は常に苦しみ悲しむことになる。体裁よく整えてやろうとする恵みの心は、誠に有難くは感ずるが、惜しいことに、そうすれば、自然さを失ってしまう。人から見れば美人でも、鳥や獣が会えば群を乱すもの。天意の前では、ほんの少しのことでも慎まねばならぬ。

其九

- | | | | | | | | | | | | |
|-------------|----------|-----------------|-------------|-----------|----------|-----------|----------|--------------|-----------|------------|----------|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 乃使途路嘖 | 君看金谷賁 | 何況履要津 | 懷寶實可懼 | 取與非鱸尊 | 張翰起歸思 | 所貴在哲人 | 朝露察危機 | 墜葉紛一振 | 草木淹黃落 | 玄秋變此晨 | 北風勁天地 |
| 乃使途路をして嘖らしむ | 君看よ 金谷の賁 | 何ぞ況んや 要津を履むものをや | 宝を懷くは実に懼るべし | 取与 鱸尊には非ず | 張翰 帰思起こし | 貴ぶ所 哲人に在り | 朝露 危機を察し | 墜葉紛として一たび振るふ | 草木淹く黄ばみ落ち | 玄秋 此の晨より変ず | 北風 天地に勁く |

1〔古詩十九首〕孟冬寒氣至 北風何慘慄

〔顏延年「陽給事誄一首」〕涼冬氣勁 塞外草衰

2〔揚雄「校獵賦」〕於是玄冬季月、天地隆烈、萬物權輿於內、徂落於外。

3〔漢武帝「秋風辭一首」〕秋風起白雲飛 草木黃落兮鴈南歸

4〔張彥「勝露賦」〕聞墜葉而歎息 對浮雲而愁起

〔曹植「樂府四首、美女篇」〕柔條紛冉冉 葉落何翩翩

5〔阮籍「詠懷詩」其七十二〕壯年以時逝 朝露待太陽

〔陸機「豪士賦序」〕衆心日移、危機將發。

6〔班固「幽通賦一首」〕所貴聖人至論兮 順天性而斷誼

〔顏延年「陶徵士誄」〕哲人卷舒、布在前載

7〔白居易「端居詠懷」〕賈生俟罪心相似 張翰思歸事不如

〔晉書・張翰傳〕翰因見秋風起、乃思吳中菰菜・蓴羹・鱸魚膾、曰、人生貴得適志、何能羈宦數千里、以要名爵乎。遂命駕而歸。

8〔司馬遷「報任少卿書一首」〕愛施者仁之端也。取與者義之表也。

9〔王粲「四子講德論并序」(文選卷五一)〕幸遭聖主平世 而久懷實。

李善曰論語陽貨謂孔子曰 懷其實而迷其邦、可謂仁乎。

10〔古詩十九首〕何不策高足 先據要路津

11〔石崇「金谷詩序」〕余以元康六年、從太僕卿出為使持節監青徐諸軍事、有別廬在河南縣界金谷澗。時征西大將軍祭酒王詡當還長安、余與衆賢、共送澗中、賦詩以叙中懷。

〔新唐書・員半千傳〕上書自陳臣家貧、不滿千錢。

12〔周易・繫辭下傳〕天下何思何慮。天下同歸而殊塗。正義曰、天下萬事終則同歸於一。但初時殊異其塗路也。

〔沈約「六憶詩」〕笑時應無比 嗔時更可憐

北風が天地をつよく吹きあれ、秋は今朝から冬とかわってゆく。草木はあちこちで黄ばみ落ち、落葉も一しきり風に翻って舞う。看る看るうちに稀く朝露に身の危機を察知し、大切に思うのは哲人のことだ。張翰は禍を避けて帰郷の念を起こしたのであって、選びとったのは鱸魚の膾や蓴羹のためではなかった。宝のごとき大才を懷いて野にいる人は実におそろべき人物であるが、まして主要の地位にある人ならいうまでもない。ほら、あの金谷に別荘を構えた石崇の資力は大き過ぎたので、なんと当路の人を嗔らすことになったではないか。

其十

1 希聲賞雅奏 希声 雅奏と賞せられ

2 重器無繁音 重器 繁音無し

3 北里盛師涓 北里 師涓を盛んにし

4 麗曲妖以淫 麗曲 妖にして以て淫

5 神鼎鑄金鏞 神鼎 金鏞を鑄

6 懸寓久浮沉 寓に懸けて久しく浮沉す

7 萬物貴同氣 萬物 同氣を貴び

8 蜀桐實所尋 蜀桐 実に見る所なり

9 但云叩不鳴 但だ云ふ 叩きて鳴らずと

10 乃使瓦缶侵 乃ち瓦缶をして侵さしむ

1〔老子・第四十一〕大器晚成、大音希聲、大象無形、道隱無名。

〔宋史・樂志〕嘉薦斯備、雅奏具揚

2〔孟子・梁惠王下〕毀其宗廟、遷其重器

〔謝靈運「會吟行」〕六引緩清唱 三調伶繁音

- 3 〔阮籍「詠懷詩」其十二〕北里多奇舞 濮上有微音
〔王讚「雜詩」一首〕師涓久不奏 誰能宣我心
 - 4 〔晉書・文苑伝序〕窮廣内之青編、緝平臺之麗曲
 - 5 〔嵇康「雜詩一首」〕鸞觴酌醴 神鼎烹魚
〔張衡「東京賦」〕設業設虛、宮懸金鏞
 - 6 〔阮籍「詠懷詩」其十二〕輕薄閑遊子 俯仰乍浮沉
 - 7 〔尚書・泰誓〕惟天地萬物父母、惟人萬物之靈。
 - 8 〔任昉「為齊明帝諱宣城郡公第一表」〕〔文選卷三八〕世祖武帝情等
布衣、寄深同氣。李善曰曹植「求自試表」〔文選卷三七〕誠與国分形
同氣、憂患共之者也。
 - 8 〔李賀「李憑箏篋引」〕吳絲蜀桐張高秋 空白凝雲頽不流
 - 9 〔水經注・漸江水〕異苑曰晉武帝時、吳郡臨平岸崩、出一石鼓、打之
無聲、以問張華。華云、可取蜀中桐材、刻作魚形、扣之則鳴矣。於是
如言、聲聞數十里。
 - 10 〔李商隱「行次西郊作一百韻」〕濁酒盈瓦缶 爛穀堆荆困
- 極めてかすかな音も高雅な演奏として賞せられ、宝物の楽器で音色豊かな音楽をかなでることもない。北里では亡国の音楽とされた師涓のごとき楽曲が盛んに演奏され、華麗な音曲は妖艶ではなはだ度を過している。精妙なる鼎で金の大鐘を鑄、それを久しい間、高く低くつりさげる。物みな氣を同じくすることを貴び、それ扣くあの蜀桐を実に尋ね求めた。ただ、叩いてもよいひびきで鳴らないので、なんと酒つぽにとつて替わられたということだ。

其十一

- 1 皎皎天女星 皎皎たる天女の星
- 2 雲錦爛七襄 雲錦 爛めき 七襄す
- 3 一織衣十人 一たび 衣十人を織り
- 4 祈寒道相望 祈寒 道 相望む
- 5 豈無乞巧術 豈に乞巧の術無からんや
- 6 明河照縫裳 明河 縫裳を照らし
- 7 尚方重絺繡 尚方 絺繡を重んず
- 8 費日刺文章 日を費して 文章を刺し
- 9 蠶桑曠所業 蠶桑 業とする所を曠め
- 10 織婦徒倉皇 織婦 徒だ倉皇たるのみ
- 11 唐風譏織手 唐風 織手を譏り
- 12 無乃儉德涼 乃ち徳を儉にして涼しむこと無からんや
- 13 始知三五世 始めて知りぬ 三五の世
- 14 機絲有餘箱 機糸 余箱有るを
- 1 〔古詩十九首〕迢迢牽牛星 皎皎河漢女
- 2 〔江淹「雜體詩・謝臨川」〕赤玉隱瑤溪 雲錦被波汭
- 3 〔顏延年「夏夜皇從兄散騎車長沙一首」〕〔文選卷二六〕九逝非空思
七襄無成文 李善曰韓詩曰歧彼織女 終日七襄 雖則七襄 不成報章
- 4 〔尚書・君牙〕冬祁〔祈〕寒、小民亦惟曰怨咨。
- 5 〔曹丕「燕歌行」〕牽牛織女遙相望 爾獨何辜限河梁
- 5 〔荊楚歲時記〕七夕婦女結綵縷、穿七孔針、或以金銀鏤石為針、陳瓜果於庭中以乞巧。

6 〔歐陽脩「秋聲賦」〕星月皎潔 明河在天

〔詩經・魏風・葛屨〕摻摻女手 可以縫裳

7 〔漢書・百官公卿表〕少府屬官、有鈎盾・尚方・御府。

〔陳深「曹叔端見過索餞篇」〕詞華爛綺繡 問學滋新畲

8 〔礼記・哀公問〕有成事、然後治其雕鏤・文章・黼黻以嗣

9 〔玉台新詠・日出東南隅行〕羅敷善蠶桑 采桑城南隅

10 〔張華「博物志」卷三〕遙望宮中多織婦、見一丈夫、牽牛渚次飲之。

〔抱朴子・正郭〕倉皇不定

11 〔春秋左氏伝・襄公二十九年〕為之歌唐。曰思深哉。其有陶唐氏之遺民乎。不然何其憂之遠也。非令德之後、誰能若是。

〔毛詩・唐風〕蟋蟀、刺晉僖公也。儉不中礼、故作是詩以閔之。欲其及時以礼自虞樂也。此晉也而謂之唐、本其風俗。憂深思遠、儉而用礼、乃有堯之遺風焉

〔徐陵「玉臺新詠序」〕魏国佳人、俱言訝其纖手

12 〔周易・否〕象曰天地不交否。君子以儉德辟難。不可榮以祿。

〔江淹「別賦」〕〔文選卷一六〕巡曾楹而空 撫錦幕而虛涼 李善曰涼、悲涼也。

13 〔班固「東都賦」〕〔文選卷一〕勲兼乎在昔、事勤乎三五。李善注曰史記〔孔子世家〕楚〔令尹〕子西曰「今孔丘述三五之法、明周召之業。春秋元命苞曰伏羲・女禍・神農為三皇。史記五帝本紀曰黃帝・顓頊・帝嚳・帝堯・師舜也。

14 杜甫「秋興八首」其七「織女機絲虛夜月 石鯨鱗甲動秋風

夜空に皎皎と輝く織女星は、雲の縫取りをした五色の錦をきらめかすがごとく軌道を移してゆく。織女が一たび織れば、十人分の衣を織るこ

とができるが、寒い冬の間は、天河の河道のそばで牽牛を相望むだけ。どうして乞巧の術が無いことがあるう。あの天河が裳を縫う女たちを照らしているのだから。宮廷の御物を蔵する尚方では、彩色の縫取りを貴重としており、織女は幾日も日を費して、文様を縫取りしている。桑を植え蚕を飼う業務は大きくなり、織女はただもうあわただしく機織をばかり。たしかに唐風の歌謡は、織女をつつましやかな手振りを刺っているが、かえって自己の才徳を控え目にして悲しむことになることはないだろうか。ここに至って始めて、三皇五帝の世では、機織り糸は一杯、余分の箱にあったということを悟った。

(其十二以下待読)